

やつくい

多治見市立南姫中学校
学校報 No.10
平成30年2月1日

「自ら考え」「正しく判断」そして、『動く』

校長 宇津 慎一

平成30年がスタートして早くも一ヶ月が過ぎました。今年は2月に平昌冬季五輪、6月にサッカーのロシアワールドカップなど、スポーツの世界大会があります。楽しみにしている人も多いのではないのでしょうか。先日、スキージャンプの代表選手が発表されました。やはり注目されるのは、8回目の出場となる葛西紀明選手です。年齢は44歳、ジャンプ界ではレジェンドとして讃えられているだけでなく、今も現役として世界トップレベルで競技を続けています。年は新しくなりましたが、それぞれの学年において、いよいよ締めくくりの「最高の姿」を目指す時期です。



冬休み明けの全校集会では、『自ら考え動く』ことについて、昨年末の朝の様子や自分を変えた3年生男子について紹介しました。そして、「大切なことは人と比べるのではなく、自分をしっかり見つめ、正しく判断して行動すること」と話しました。

3年生は、1月から入学試験が始まり、それぞれの進路実現及び、各学級「高みをめざして」「無敵」の学級目標達成に向け、ラストスパートに入っています。また、中学校3年間、義務教育9年間の総まとめとして、日常の生活や生徒会活動など「当たり前なことを当たり前でできる」にこだわって頑張っています。感謝の気持ちで一日一日を大切にして、卒業式を迎えてほしいです。

2年生は最高学年、1年生は上級学年へ向けてのステップとなります。これまで支えてもらった3年生に感謝の気持ちを含め、安心して卒業してもらえるように、やりきることを自ら明確にして、行動することが大切です。

ところで、みなさんは生徒玄関の下駄箱や校内のトイレに掲示してある詩を思い出せますか。題は「はきものをそろえる」です。

はきものをそろえると心もそろう 心がそろうとはきものもそろう
ぬぐどきにそろえておくと はくどきに心がみだれない
だれかがみだしておいたら だまってそろえておいてあげよう
そうすればきっと 世界中の人の心もそろうでしょう



これは禅宗の「脚下照顧(きゃっかしょうご)」の教えをもとに、藤本幸邦住職がつくられた詩です。脚下照顧とは、他に向かって理屈を言う前に、まず、自分の足下(身近なこと)を見て自分のことをよく反省すべきであるという意味です。

「最高の姿」を目指し、自分をしっかり見つめ、『自ら・考え・動く』を合い言葉に、南姫中全校144人が心をそろえ行動していきましょう。

【2月】

行事予定

日	曜	行事予定	原則 1650 下校
1	木	授業参観 学校評議員会	1450 下校
2	金	ALT 来校 市教研・午前授業	13:15 下校
3	土	土と版画展 (パロー文化ホール) 9:00~	
4	日	土と版画展 (パロー文化ホール) ~5日午前迄	
5	月	ALT 来校	1620 下校
6	火	SC 来校	1620 下校
7	水		1520 下校
8	木	1・2年期末テスト①	1・2年 1345 下校 3年 1620 下校
9	金	1・2年期末テスト②	1520 下校
11	日	建国記念の日	
12	月	振替休日	
13	火		1520 下校
14	水		1520 下校
17	土	環境フェア (まなびパーク)	
19	月	H30前期生徒会役員選挙告示 PTA母親委コサージュ作り	
20	火	SC来校	
21	水		1550 下校
22	木	3年三味線実習 PTA常任委員会	
27	火	3年奉仕活動	

【3月】

- 1日(木) 伝統継承の会
- 6日(火) 卒業証書授与式
 - ・保護者-8:45着席
 - ・開式-9:00
- 7日(水) ①出発式
- 8日(木) 公立高校一次選抜試験(9日迄)
- 12日(月) ④生徒会演説会・選挙
中学校半日入学
- 14日(水) PTA地区委員会
- 15日(木) 公立高校一次選抜合格発表
- 20日(火) 最終大掃除
- 21日(水) 春分の日
- 22日(木) 公立高校二次選抜試験
- 26日(月) 修了式 離任式
- 27日(火) ~4月5日(木) 春休み



ふきのとう

かぜやインフルエンザの予防を！

先週は2年1組で、学級閉鎖の措置を取りましたが、まだ、インフルエンザによる欠席者がいます。市内ではインフルエンザ流行による学級閉鎖や早帰りなどの対応をしている学校があります。ご家庭でも、帰宅時の手洗い・うがいや、生活リズムを整えることなどに心がけていただき、かぜやインフルエンザの予防に努めてください。

【親育ちコーナー】

子どもにゲームをやめさせる時に効果的なのは？

多治見市教育委員会 教育推進課

3択です : ①しっかり叱る ②声をかけ自主的に止められたらほめる ③①と②の両方

子どもの脳内では、①の叱られてやめた時は、状況が許さなただけで自分の意思ではやめておらず「ゲームはとても面白かった」という思いが一番強く残るそうです。だからまたやりたいという感覚も強く残ります。②の場合、しぶしぶでも「自分でやめた」という事実があるので、続けられなかったゲームに対して「そんなに面白くないからやめたのだ」と脳が言い訳のようなことをするそうです。イソップ童話の「すっぱい葡萄」と同じで、キツネが高く届かず、食べられなかった葡萄を「きつとすっぱい葡萄に違いない」と言いながらあきらめた状態と同じだそうです。②を繰り返すと、次第にゲームに対する執着が薄れていくそうです。最初はしぶしぶでよいのです。それでもその事実に対して、しっかりほめることがミソですね。また、このことは他のいろいろなことに応用できそうです。

(「家庭教育なう」30年1月号より抜粋)

